

Economic Indicators

定例経済指標レポート

指標名: 国際収支(2006年10月)

発表日2006年12月13日(水)

～所得収支が下支えし、4ヶ月連続で増加～

第一生命経済研究所 経済調査部

担当 副主任エコノミスト 長谷山 則昭

T E L : 03-5221-4525

		原数値				季調値			
		経常収支				経常収支			
		貿易・サービス収支		所得収支		貿易・サービス収支		所得収支	
		貿易収支	サービス収支	貿易収支	サービス収支	貿易収支	サービス収支	貿易収支	サービス収支
		前年比	前年比	前年比	前年比	前期比	前期比	前期比	前期比
05	1-3月期	▲ 8.1	▲ 23.0	▲ 21.4	14.5	0.0	4.9	2.8	▲ 1.6
	4-6月期	▲ 9.8	▲ 30.4	▲ 29.7	18.4	▲ 5.4	▲ 30.3	▲ 24.7	14.3
	7-9月期	▲ 1.5	▲ 35.2	▲ 31.7	28.5	4.4	▲ 2.8	▲ 6.1	4.9
	10-12月期	13.6	▲ 8.2	▲ 18.6	30.1	20.8	30.7	10.0	12.7
06	1-3月期	18.5	▲ 13.5	▲ 28.2	42.0	▲ 4.1	▲ 9.4	▲ 6.1	7.2
	4-6月期	▲ 3.0	▲ 24.5	▲ 17.4	15.8	▲ 15.3	▲ 28.1	▲ 11.7	▲ 7.7
	7-9月期	11.8	7.1	▲ 0.1	17.5	9.1	12.7	1.2	5.0
05	10月	7.3	▲ 20.8	▲ 29.7	45.7	12.8	33.5	1.0	5.9
	11月	17.3	16.7	▲ 0.8	11.4	▲ 9.2	▲ 10.9	11.0	▲ 11.1
	12月	16.1	▲ 9.9	▲ 16.8	39.6	27.6	16.4	2.1	29.1
06	1月	2.5	赤字	赤字	33.7	▲ 18.5	▲ 13.9	▲ 20.8	▲ 10.6
	2月	10.8	▲ 7.0	▲ 11.8	32.9	6.6	8.3	28.8	3.6
	3月	34.3	6.7	▲ 6.8	58.0	▲ 1.7	▲ 18.0	▲ 14.3	9.6
	4月	▲ 17.7	▲ 59.4	▲ 32.8	12.7	▲ 30.5	▲ 64.2	▲ 36.0	▲ 15.6
	5月	16.8	29.5	11.1	15.8	32.7	259.5	86.7	▲ 10.5
	6月	▲ 6.4	▲ 13.3	▲ 12.2	23.7	▲ 2.4	▲ 40.8	▲ 26.4	29.5
	7月	7.1	▲ 8.4	▲ 8.5	23.5	10.7	54.6	25.6	▲ 8.7
	8月	22.2	396.9	36.0	11.1	▲ 6.3	▲ 4.2	▲ 3.8	▲ 7.7
	9月	9.4	4.3	0.2	19.4	▲ 12.2	▲ 63.9	▲ 45.5	19.7
	10月	5.2	▲ 36.0	▲ 18.9	36.3	43.4	219.3	95.0	8.6

(出所)財務省、日本銀行「国際収支統計」

○ 10月の経常黒字額は前年比+5.2%と増加

10月の経常黒字額は前年比+5.2%の15,146億円(原数値)と4ヶ月連続で前年を上回り、事前の市場コンセンサス(14,034億円、レンジ11,769～16,760億円)を上回る結果となった。内訳をみると、貿易収支が黒字幅を縮小し、サービス収支も赤字幅が拡大したが、所得収支の黒字幅が大幅に拡大したことが全体を下支えした。

○ 債券利子の受取が増加し、所得収支が前年を大きく上回る

貿易黒字額は前年比▲18.9%となった。輸出金額が前年比+11.1%(前月同+14.8%)、輸入金額は前年比+17.1%(前月同+18.4%)と輸出入ともに伸びが鈍化した。輸出の方が伸びが大きく鈍化したため、貿易黒字額は前年を下回った。財別に見れば、輸出は、欧米向けの自動車輸出やアジア向けの鉄鋼や非鉄金属等の素材関連輸出が堅調だったものの、一般機械や電気機器の増加ペースがやや鈍化した。一方、輸入については、液化天然ガスが大幅に増加したが、原油価格の下落を映じて原粗油の増加ペースは鈍化した。

サービス収支は前年対比でみて赤字幅が拡大した。日本への入国者数の増加から旅行収支は赤字幅が縮小したが、原油価格の上昇による運賃値上げ等の影響から輸送収支が赤字となったこと、その他サービスも前年を下回ったことから赤字幅が拡大した。

所得収支は、前年比+36.3%と黒字幅が拡大した。所得収支は、①証券投資収益が対外資産の累増を背景とした外国債券の受取利子の増大などによって増加基調を辿っていることに加え、②直接投資収益についても海外子会社の業績が好調であることを反映して堅調に推移している。10月は債券利子の受取増が大幅に拡大し、所得収支の黒字幅拡大に大きく寄与した。

○先行きも経常収支は高水準での推移が続く

先行きについては、対外資産の増加などから所得収支の黒字額の拡大が続く可能性が高く、サービス収支も基調としては赤字額が縮小するとみられる。また、貿易収支は足元で一進一退となっており、今後は黒字額が大幅に減速していく公算は小さいと考える。原油価格の高騰が輸入金額を押し上げていたが、その原油価格は10月に1バレル64.4ドル（輸入C I F価格）と9月の1バレル72.02ドルから大きく下落した。前年対比で見ても10月は+7.5%と9月の同+21.3%から低下している。原油価格の輸入金額への押し上げ寄与は徐々に剥落しており、輸入増加による貿易黒字縮小圧力は減退していると考えられる。もっとも、輸出金額についても、米国経済の減速を背景に増加ペースは鈍化してくる見込みである。輸出の先行指標であるOECD景気先行指数が下げ止まってきていることから先行き輸出が失速することは避けられるものの、当面は減速方向で推移すると考えられる。輸出の拡大による貿易黒字額の増加は当面見込みにくい。原油価格の上昇が一服したことで貿易黒字額の減少傾向に歯止めがかかる形となろう。貿易収支が下げ止まってくることに加え、所得収支の黒字拡大とサービス収支の赤字縮小が下支えする形で経常収支は高水準での推移が続くとみられる。

